

あかあまん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

企画・制作：株式会社新聞ビル

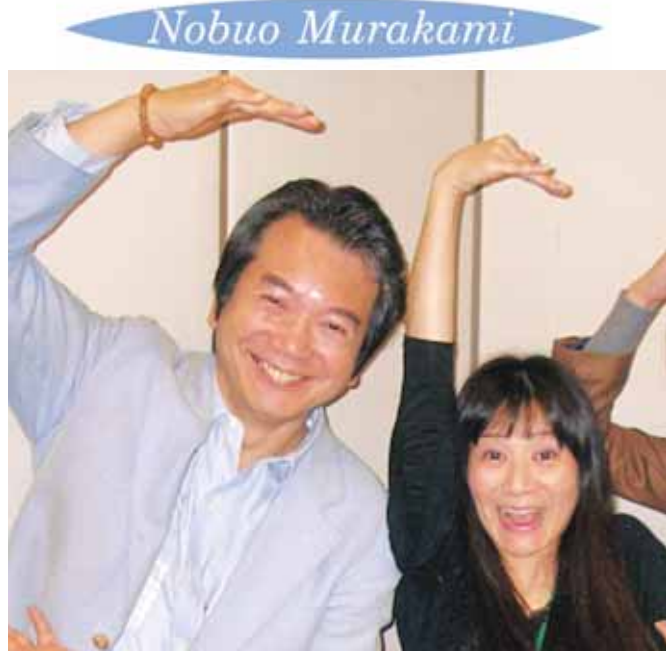
瑞雲殿
誠意と真心であんしんのかげはし
CSK葬祭
☎ 0120-33-5909
TEL 0569-35-2785
FAX 0569-35-2296
24時間
体制完備

元氣のでてくることばたち

145

村上信夫

(アナウンサー)



Nobuo Murakami

「自分が最低と思っていた。自分がバカになればいい。だが、いらぬものを背負い込んでいる人が言う。品がなくなることも、パパが言う。下品にならなかつた。仕事にも遊びにも命がけだった。」

ママは呆れ果て、怒る気をなくしてしまった。そんなパパとママだったが、ついに離婚。りえ子さん8歳の時だった。ママに母性を求めるパパと、パパに父性を求めるママは、元々合わなかつたのかも知れない。

芸術制作を学び、アーティストを志す。イギリスに留学したいと、ママに話す度に大反対された。一卵性親子のように仲良しだったママと、この件に関しては、何度もやりあった末、最後はママが折れた。94年の秋、29歳のりえ子さんはイギリスへ留学した。彼の地で、アートや英語を学び、作品展を開いて、英語の先生でもあった4歳年下のジョン・レイトさんと結婚、順風満帆な生活を送っていた。

「最後に辻褄があつてれば、いいんだよ」という言葉は、パパの口癖だった。その都度その都度、くよくよしていても始まらない。究極の辻褄合わせを、短い言葉でバカボンのパパに言わせている。「これ、いいのだ！」と。

漫画家・赤塚不二夫と言えば『おそ松くん』『天才バカボン』『ひみつのアッコちゃん』……ギャグ漫画家の巨匠、赤塚不二夫さんは、底抜けに可笑しい作品を残してくれた。一人娘の長女、赤塚りえ子さんは、フジオ・プロダクション社長として、赤塚漫画の面白さを伝える使命を担っている。

りえ子さんの著書『バカボンのパパよりバカなパパ』には、娘から見た赤塚不二夫の実像が包み隠さず綴られている。

ママは、やがてパパの家に遊びに行くようになった。こうしてみんなが仲良しになった。パパは、真知子さんと再婚する。真知子さんは、パパの母親役だった。パパは、人に紹介するとき、ママを「もとによつ、真知子さんを「いまによつ」と言い分けていた。

仕事と看病が、真知子さんの命を縮めた。2006年6月、真知子さんがくも膜下出血で倒れ、数日後に亡くなったのだ。享年56という若さだった。

真知子さんの遺言で、りえ子さんは12年のイギリス生活にピリオドを打ち、社長という名の新人社員になった。

真面目なバカ

赤塚家では、「バカ」は最高の褒め言葉だった。りえ子さんも、「バカ」と言われるのが、いちばん嬉しかった。パパは、相手が面白い時、人間的に「かわいい」と思った時、「バカ」と言った。りえ子さんは、「真面目にバカが出来ると、パパはかっこいい」と思っていた。「もっと真面目にぶさけなさい」というパパの言葉が、りえ子さんは大好きだ。

「不思議な仲良し家族」
パパの赤塚不二夫さんは、1935年、旧満州の生まれ。日本に引き揚げ、手塚治虫に憧れ、漫画家を目指す。ママの登茂子さんは、パパのアシスタントであり、アイデア提供者だった。『おそ松くん』の6つ子のアイデアはママが出したものだ。無名で貧乏だった頃、パパの窮地を幾つも救った。

りえ子さんが生まれたのは、1965年3月のことだった。パパの漫画は、超人気を博し、自宅を多くの人が訪れ、幼いりえ子さんも、様々な訪問客に可愛がられたが、「あなたが有名なわけじゃない。たまたまママが顔の出る仕事をしているだけだから」とママにたしなめられていた。「あなたがいうノーマは、ほかの人のノーマとは違って聞こえるからね」と言われた。

「哀しみを帳消しにするエネルギー」
りえ子さんは、高校卒業後、専門学校で映像

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

パパは、「知性とバイオニア精神にあふれたバカ。立派なバカになるのは大変なんだ」とも語っている。常識を知っているから、常識が壊せる。パパは正に、バカボンのパパを地で行くような性格で、自分の行動と表現に何の矛盾もなかった。人を分け隔てせず、社会的地位や学歴で人を見ず、誰とでも仲良くなれた。パパは、少年時代に大切だったものを手放さずに生きていた。パパといると、みんな少年少女に戻った。

「派手な女性関係すらもギャグになった。ママの一喝に、パパは惚れ惚れするように「カッコイイ」とのたまう。こらえきれず笑ってしまった

「派手な女性関係すらもギャグになった。ママの一喝に、パパは惚れ惚れするように「カッコイイ」とのたまう。こらえきれず笑ってしまった

「派手な女性関係すらもギャグになった。ママの一喝に、パパは惚れ惚れするように「カッコイイ」とのたまう。こらえきれず笑ってしまった

おとなのフルート教室
大人でも上達する！
何か始めたいと思ってる貴女。数年後、素敵にフルートを奏でる姿がそこにあります。楽しく個人レッスン致します。

講師 **イネ・セイミ**
フルート奏者 指導歴30年
1レッスン/時間5,000円(テキスト代別)
お申込み 0569-89-7127
お問い合わせ seimi@oasis.ocn.ne.jp

好評発売中
ことばのビタミン
村上信夫



作画/イネ・セイミ

愛知県立大学名誉教授

山田正敏

『バリ島行ったり来たり』(35)



《続・消えゆく》

“身近かな田舎”

— 変りゆく

《農村の生活》

記憶が正しければ、私の出生地は、昭和24年（一九四九年）に、市制が施行され、「碧南市」となった。戦後第一次の町村合併によるものだと聞いている。

それ以前は、「愛知県碧海郡旭村字神有」という地名であり、矢作川河口右岸に広がる朝日（旭）の美しい豊穡な田地畑に恵まれた純農村であった。日本のデンマークの地域は、上流の地続き。同じ郡に属し明治村とも言った。

この市制施行の話聞いて、新制高校に進学したばかりの私は、親にまじめな顔つきで、「市になると、名古屋のように、市電や市バスが通るのか——、いつ頃からか……。」と、執拗に尋ね廻り、家族から失笑を買った。このことは、未だに鮮明に記憶の中にある。

農村が、「町」を飛び越して、一挙に市電・市バスの走る、あの都会名古屋と同じ「市」に昇格するのだから……。驚きと喜びに塗れ、「二階級特進」だ——と、一廻りも二廻りも偉くなったつもりでいたのだらう。三町一村の合併で単に人口が増

逆に、村人との日常交際の範囲も広がり、深まっていた。
風呂を石炭・コークスで沸していたわが家が、燃料不足で困っている、「貫い風呂」に誘ってもらえた。時には「五右衛門風呂」の底板の処理に困惑し、友達に指導を受けたことも思い出す。まさに「裸のつき合い」である。

子どもの吉界は、今日のような学習塾・家庭教師もなく、家畜の古話をしてたりそれを一緒に手伝って、早く遊びにでかけたり、いつも友達と一緒に、「のんびり」と「わくわく」楽しく暮らしていた。

わが家の前には「下駄や」という屋号の、大人から子どもまでの生活用品万般を商う店があった。酒も菓子も文房具も……。まさに「田舎の百貨店」雑貨店——。永い年月、住民の購買要求を積み重ねてきた「品揃えの成果」だろう——。贅沢品以外は、なんでも揃っていた。私たち村人には、「ありがたいお店」であった。

店の横並びには、おじさんの「下駄づくりの工房」。道沿いに見学できる。四角の木片から、それぞれの下駄が削り出されてゆく。道具は大小さまざまな鋸と鉋とノミ——。三つの単純な金具を操って……。その手技の妙技に「見とれ」感嘆の溜め息を吐いたり、手を叩いたり……。

とくに友達と二人で注文した二足の下駄が出来上がる工程は、時の経つのも忘れ手に汗して、その出来上りに、「集中」して見つめていた。これらの体験は、今も鮮明に思い出す。

未だに私は「興味・関心のある事柄」には、「集中」する。その「力」は、この「子ども時代の生活」の中

で養われ、鍛えられたように思う。それと同時に、大人達のさまざまに「手づくりの妙技」に興味関心を持ち、さらに人間の指先のスバラシサとその構想（デザイン）の豊かさにも気づかされ、学ばせてもらったように思う。

日本の郷土玩具、バリ島の絵画・彫塑・彫刻の美しさと実用性に魅せられ、私の半生を築き上げてもらったのも、この私の子どもの時代の田舎の生活体験が「核」になっていることは間違いない。

《いま、農村の生活が衰退するといふことは……》
それは、ただ単に「食糧の自給率の低下」だけの問題ではない。それは輸入で補うことも出来るかもしれない。

私は日本が六〇年代以降「先進国に仲間入り」する時点から、忘れ去り、失いかけていく（本号で述べようとした）「かつての田舎の生活のもつ子ども達がひとなる（人に成る）ための環境」が、衰退し消滅し、子ども達が「ひとなり、そこなつてゆく」ことを憂慮するのです。

この忘れ去ったものを、バリの農民やその人々の暮らしの中に私は見出すようにしています。どうもそれでいう「吉界で精神病の一番少ない地域のエッセンス」だと思います。「単純な当り前の生活の環境です。」

《お願い》
読者のみなさんの御意見をお寄せ下さい。その上で、本連載の「まとめ」を書かせて頂きます。

《私の子ども時代の》

《農村の生活》

日本の農村の様子は、その地形によって、集落と田畑の位置が決まってくるようだ。

例えば、富山県の平野部の農村では、防風林にもなる木立に囲まれた大きな農家が、広い田畑の中に点在している。いわゆる「散居村」と呼ばれる、北陸富山地方の風土に合った農村の形態である。広辞苑の辞書の田舎の説明どおり「家がまばらで、田畑や山林などが多いところ」である。

私の身近かな三河平野部の農村は、農家が寄り添って「集落」をつくり、それぞれの田畑に出かけ、農作業に従事し、農器具や収穫物を「リヤカー」などで持ち運ぶ、いわゆる「職・住分離」の農村が多い。私の実家のある農村の集落も、そ



“農民の香りのする”バリの百姓

連載●ほりお教授の紀行文学シリーズ

ロマンチック沖繩旅物語

第二回

マングローブを植える、イン名護

堀尾 幸平



「そう。COP10。Conference of Parties 10 来月、名古屋で開催されるので今、大変。で、急なことだけと先生に生物多様性に関連したものをお願いしたいの」

COP10は国際条約を結んでいる締約国会議。多様な生き物や生息環境を守り、その恵みを将来にわたって利用するために結ばれた生物多様性条約である。

「で、多様な生物を育む環境の一環として、ちょうど沖繩におられる先生に、マングローブを植樹してもらいたいんです」

「マングローブを植える？」

「あまりに突然でびっくりした。話はあるがたいが、ぼくの専門は文系で、自然科学系じゃないよ。ぼくでいいの？」

「もちろんです。ほりお教授でなくっちゃ駄目。先生のユニークな人格と文章展開で、ぜひお願いしたいの。二年前の「文学」の記事、大好評でしたよ。お願いいたします！」

電話の向うで手を合わせている恵子の姿が目に見えるようである。「それで恵子さんも来てくれるだ

「先生。ご無沙汰。山中恵子です！」

「ナンダ、恵子サンか」

「ナンダは、ないでしょ。ほりおゼミの優秀だった恵子がわざわざ電話したんですから」

恵子の元気のいい明るい声は学生時代と少しも変わっていない。

恵子は、ぼくが大学に勤めていた頃のゼミの優秀な学生で、何百倍という競争で念願のマスコミ、T新聞社に入社して七年目。最近はその記事の末尾に名前を見るほど活躍している。一昨年の新着文化欄に「現代文学の行方」を書かせてもらった。その打ち上げで名古屋の栄で飲んだ日以来である。

「先生。いま沖繩にみえるんですね」

「どうして、ぼくが沖繩にいたことが分かった？」

「当り前ですよ。新聞記者なんだから」

「で、また何か書かせてもらえる

ろうね？」

「先生、ごめんください。恵子は名古屋の国際会議の準備で出られないの。そのかわり沖繩の優秀な子を紹介するから、安心して」

というわけで、沖繩、名護市在住の森林インストラクターの坂下宙子さんを紹介された。

「人のいいチャームिंगな子だから。先生、仕事以外にお熱を上げては駄目ですよ」

「ぼかを言うな」

電話を切った後で、正直なところ、恵子が来てくれれば、おもしろいと思った。

新聞社の仕事は、雑誌社と違って緊急の場合が多い。今回のマングローブの記事もぼくの旅行中の日程などおかまいなく恵子に強制的に日時を指定されてしまった。

那覇に泊まっていたぼくは、翌々日の朝、電車とバス、タクシーを乗り継いで、名護市の屋我地の海岸に約束三十分前に着いた。

「めんそーれ(イラッシャイマセ)」

現地で初対面の、五、六人の女性とカメラマンに笑顔で迎えられた。みんな陽に焼けた顔に真白い歯が光っていた。

紹介される前に、麦わら帽のやさしい感じの人が坂下宙子さんであ

ることはすぐに分かった。やはり恵子が言ったようにとびきりの美人で、ぼくの胸は早くもときめいた。助手の三井さん、竹中さんがしぼり立てのマングローブを飲み干してくれた。三十四、五度の炎天下、このほかおいしかった。

名護市の西方、屋我地島鏡平名海岸――。

「ここは、北緯、26°39'37.6"、東経、128°01'10.0"の地点であります」

宙子先生が細い指で地図を示した。海岸沿いに低い雑木林があり、その向うに干潟が延々と続いている。「マングローブを植えるのは、あちらの左岸です。少し距離があります。歩いて下さい」

先に立つて身軽に歩く麦わら帽



子の宙子先生は、実にかつこうよかった。先生は時たま落ちてくる木片れやゴム、ビニールなどのゴミを拾って行く。

沿岸沿いの雑木林と思ったのは、ほとんどマングローブの群生であった。周辺には、さまざまな大小の植物、生物が生息している。

「あ、マネキガニが私たちを招いています」

「ここで大シジミが休んでいますよ」

初めて観察するイトミミズ。鳥たちが羽ばたき飛んでいく。さまざまな生き物が動き、遊んでいる。マングローブは空気を清浄化し、自然環境を見守り立っている。

「三十八億年も前に現在の生物すべてが、この海から誕生したのですね」

宙子先生は、やさしく温かく、目に触れるものについて説明をしていく。「現代の生物学は、多様な生き物がDNAを基本とする細胞からできているという共通性を発見しました。つまりすべての生きものは共通の祖先から生まれた仲間なのです」

「おだやかで美しい先生の言動からほとぼり出る自然に対する強い愛情と使命感に圧倒されながら、やがて植樹の区画に着いた。

「さあ、植えましょうね」

マングローブの苗木がビニール製のポットに並べられている。二十センチくらいで、苗木の赤ちゃん、子どももみたいで可愛い。

「マングローブは、海水と淡水が混じり合う場所に生息しますので、ここ屋我地の海岸が最適なのです。ほら、この苗木たちのうれしそうなお表情をこらして下さい」

先ほどから助手の三井さんと竹中さんが苗木をやさしく撫でていた。

沖繩の人たちはマングローブのことをヒルギと呼んでいる。オヒルギとメヒルギがある。

マングローブは空気を取り込むために根(気根)をタコの脚のよう



に伸ばしている。

自分の子どもたちが過酷な環境でも生き延びられるように樹上で十か月かけて苗(胎生種子)を育てるのである。

「子ども想いのヒルギですね！」

先生の説明に近くにいた高校生たちが感心してうなずく。

子どもは棒状に成長すると干潟に落ちて自分の力で成長していく。落ちて根をはれない苗木は長いエンピツのような形で、干潟の親木の根元に転がっている。

「まあ、かわいそうに。迷い子になっちゃったのね。今にいい場所を探してあげますからね」

宙子先生が、やさしく拾い上げる。

「さあ、ここがヒルギちゃんのお里になります。さあ、植えましょう」

ぼくたちは干潟の定められた位置にスコップで穴を掘って七〇センチほどの間隔で一本ずついねいに植えていく。

「ほりお教授。カメラを意識しないで、恋人だと思って真心をこめて植えて下さいよ」

インストラクターが笑いながら僕に指示をする。

「ハイ」

ぼくも大きく返事をして一層がんばった。

簡単だと思った穴掘りも石ころ等が混じっていて案外骨が折れた。それから、かなりの時間をかけて二百本ほど。植樹作業は終わった。

海岸が上がって植樹状態を見わたすと、少年時代、田舎で体験した田植えのようにきちんと植えられていて、みごとである。

「バンザイ！」

ぼくは満足で思わず大声で叫んでしまった。みんなが笑い、手をたたいた。

「大変じゃありませんでした。苗木も喜んでいるでしょう。ありがとうございました」

宙子先生にもほめられた。いくつになってもほめられると、うれしい。「苗木は、五年も経つと、りっぱな成木になって環境の浄化に役立ちます。その頃、ぜひ見に来て下さい」

「はい。必ず見に来ます。それまで、いろいろ、面倒なお世話をお願いいたします」

「はい。おまかせ下さい。手を抜くと、記者の恵子ちゃんに叱られそうですからね」

宙子先生がいたずらっぽく顔で笑った。

ぼくは五年後、恵子と一緒に成長したこのマングローブを必ず見に来ようと思った。

恵子の記事になるであろう植樹修了式で、ヒルギの赤ちゃんをモチーフにした宙子先生お手製の「ヒルギまんじゅう」をこ馳走になった。素材はすべて沖繩産の紅いものあん、黒糖、屋我地の塩。そのうまいこと。うまいこと！

ぼくは、すっかり幸せな気持ちになって、このヒルギまんじゅうの味は生涯忘れられないだろうと思っ

て、ごちそうになった。

沖繩の青く広い海が潮騒を奏でながら、ぼくたちをやさしく見守っていた。

(つづく)

《筆者紹介》

ほりお・こうへい。作家、「日本学術出版」代表。名古屋大学研究室修了。元愛知淑徳大学文学部教授。著書多数。現住所、名古屋市南区元桜田町四一五五。

知多の動植物雑記(二六六)

原 穰

先月の十月初め、かつての同僚田中央氏から電話。「東浦でタガメが見つかった」と。エ、タガメ？タガメは今や知多半島では絶滅種だよ。ワシは昭和24年7月に東海市の名和で捕ったけど写真左、それ以来一度も見えてないヨト。



でも彼は「小学校の子が自分の家の睡れん鉢の中に泳ぐタガメを見つけ、水槽で飼っていたが、二十日ばかりで死んでしまったので持ってきてくれた」と。私は61年ぶりに会えるなんて疑問ばかりが先行し、ぜひ見て確認したい、写真を撮りたいと、田中邸を訪れ、ば、さすが同好の士、標本化したタガメを写真撮影用に青い紙を敷いて準備万端。見れば、前脚右側は途中で折れていたが、タガメには間違いない。早速カメラに収め(写真右)、なぜ、どうして東浦に？をしやべり始める。とにも角に

タガメ 61年ぶりの再会 だが？

田中邸を訪れ、さすが同好の士、標本化したタガメを写真撮影用に青い紙を敷いて準備万端。見れば、前脚右側は途中で折れていたが、タガメには間違いない。早速カメラに収め(写真右)、なぜ、どうして東浦に？をしやべり始める。とにも角に

町の考古学

古船(百五十七) 奥川 弘成

遺跡

十一月二十八日まで武豊町歴史民俗資料館で「木造和船の歴史展」と題して丸木船から平安鎌倉時代の和船を模型で紹介する、展示会を開催しています。この展示会は、平成十九年に開催した「武豊港と和船展」につづく和船模型をベースとした船の移り変わりを紹介するものです。今回は、原始古代から近世初期にいたる船に焦点をあて、前回と同様に前田和正氏(武豊町山ノ神在住)による作品群で構成されています。前田氏の作品製作の基点は、石井謙治氏(海軍歴史博物館)の著書『和船の歴史』にあります。若きころに石井氏との交流があった模倣製作にかかわり始めたといえます。模型の製作は、戦国時代から江戸初期の海の見張り

も田中氏とは、かつて東浦町誌自然編々集のため池や川の生物調査をやった仲間同士。私自身も長い年月、知多半島の川の生物調査に係わってきたが、タガメは全く見たことない。疑問符を残したま、彼の自慢の水槽に棲む魚談義にしばしの時を過ごす。しかし、実事はどうなんだろうと、帰宅後、豊橋の自然史博物館に電話すれば「現段階で確認されてい

船であった関船にはじまり、平安貴族が遊興で使った川屋形船。そして徳川三代将軍家光が建造をすすめた海上の要塞であった安宅丸の大作を造り上げました。この製作によって、前田氏による日本の歴史上の船を復元するライフワークがはじまりました。その過程では、石井氏をはじめ関東や瀬戸内の和船研究者と積極的に研鑽し、和船への理解を深めてきました。昨年、今回の展示を目

鎌倉時代の絵巻物「北野天神縁起絵巻」の中に菅原道真が九州の大宰府に左遷されたときに船出する様子が描かれています。その船は、船の底が、丸木船や古墳時代遺跡船と変わらな

の姿を描いています。そこには「いと大きな船を堀出し、この船住古の製に手くすの丸木船なるが三ヶ所つぎて、かんぬきもつてこれをさす」とあります。

吉田ひろし 片岡光志 関里江 竹内すけ代 塚本千鶴 小島彩 村田政子 齊藤浩美 加藤久子 桑山永子 林京子 富田悦子 清水文月 高谷達之輔 高谷三彦 沢田藤子 幾世八千代 磯村美耶子 村井みさを 村井みさを 山下悠児 杉江キヨ 井野清子 伊奈洋子 中村洋子 柴山庄山

マニアの方であれば市内は問いません。出店多数の場合は主催者で抽選。出店数 十五店 申込 十日金まで 参加費 無料 問合せ 地域文化センター 42-1101

ちよとこおじやまします

三代 片山白山さん。長年にわたり、緑泥の藻掛け釉の美しさを追求し続けている人がいる。その人とは三代、片山白山さんだ。白山さんの祖父は常滑に陶房を開き、父は伝統工芸士として活躍した人である。白山さんは父に作陶を習い、数多くの受賞歴をもち、現在は日本煎茶工芸協会正会員、また常滑手造り急須の会会員として活躍している。小学校を訪問し、小学生に美味し煎茶の入れ方を教える活動もしている。今や緑泥の急須で注目を集める白山さんだが、緑泥を始めたきっかけは父と違うものがやられたこと、という。いたってシンプルで理由がた。深い緑色が特徴の「品だ、白山さんとお会いしたのは10月半ば、季節はもうすっかり秋になっていた。私は秋風に何となく人恋しさを感ずるようになったのか、肌寒さを感じてしまったのか、この深い

若竹俳壇 吉田ひろし 片岡光志 関里江 竹内すけ代 塚本千鶴 小島彩 村田政子 齊藤浩美 加藤久子 桑山永子 林京子 富田悦子 清水文月 高谷達之輔 高谷三彦 沢田藤子 幾世八千代 磯村美耶子 村井みさを 村井みさを 山下悠児 杉江キヨ 井野清子 伊奈洋子 中村洋子 柴山庄山

二月二十二日(火)の火曜日 全十回 午後七時半、同七時半 内容 リズに合わせた親子で身体を動かすふれあい遊び。講師 青木アツシさん(親子ふれあい体操講師) 対象 おおむね二歳児(就学前の子)とその親。定員 二十八組(申込多数の場合は抽選) 申込み 親子一組(千五百円) 申込み 親子二組(千五百円) 申込み 親子三組(千五百円) 申込み 親子四組(千五百円) 申込み 親子五組(千五百円) 申込み 親子六組(千五百円) 申込み 親子七組(千五百円) 申込み 親子八組(千五百円) 申込み 親子九組(千五百円) 申込み 親子十組(千五百円) 申込み 親子十一組(千五百円) 申込み 親子十二組(千五百円) 申込み 親子十三組(千五百円) 申込み 親子十四組(千五百円) 申込み 親子十五組(千五百円)

